

# 落葉集本篇の組織について

森 田 武

吉利支丹版落葉集については、土井先生の「落葉集考」(吉利支丹の研)に細かな考察がつくされている。それ故本稿では、本篇の組織について注意すべき点だけを記そうと思う。

## 一、母字の排列

(一) アルファベット順の排列

本篇の組織については、「落葉集考」に次の諸点が明らかにされている。

- (1) 字音による発音引。イロハ順の四十七部立だが、実際はエ・オ・キを除く四十四部から成っている。
- (2) 各部は清音・濁音の二類に大別し、同音の母字群を清・濁の順序に次第してある。
- (3) 清・濁各類の中では、仮名一字のものから二字三字のものへと並べてある。
- (4) 二字以上のものは、「く」「い」「ん」「つ」「う」に終るものの順に並べ、拗音をその間に入れる例だが、前後した所も多い。
- (5) Tの入声は促音と同じく「つ」で示す。

(6) 同じ発音の漢字を出す順序に基準はない。

(7) 各母字下に列挙した熟字は、意味連関によつて並べた跡が認められる。

右の諸項は、例証をあげて詳論してあるので、こゝには述べない(上掲書二)。たゞ、(4)はさらに細かな、そして整つた排列基準になるもののである。各部を見わたす時、「く」「い」「ん」「つ」「う」の順は著しい傾向であるが、これに匹敵するものに

「う」「く」「い」「ん」「つ」の順になつた部がある。

(a) ま(磨・麻……) まく(莫) まい(売・味……) まん(満・万……) まつ(末) まう(盲・妄……)

(b) そ(疎訴……) そう(窓・惣……) そく(息・即……) そんな(尊・村……) そつ(即・足) そう(懂・増) そく(俗・賊) ぞん(存) ぞつ(俗) 【便宜上音調の】

この両者を通じて「く」「い」「ん」「つ」の順が動かない事、及び(b)のように清音と濁音とは同じ順である事に注意を要する。さ

らに細かに見れば、「う」の位置の違いは、それが示す発音の違いに対応している事が知られる。即ち(a)の如く終りに並べた「う」は、「まう」「かう」などア段の仮名に添うてオ段長音の開音を

示す場合で、(b)の如く初めに並べたのは、「こう」「そう」など  
オ段の仮名に添うてオ段長音の合音を示す場合か、または「く」「  
「すう」などウ段の仮名に添うてウ段長音を示す場合かである。  
こゝに何か排列基準の存在が予想されるが、それは仮名の順序と  
しては互に異なる右の二類を同時に満足させるような、仮名以外  
の基準でなければならぬ。こゝで擬せられるのはアルファベッ  
ト順である。前の(a)(b)を吉利支丹流のローマ字綴に直してみ  
ると、次のようになる。

(a) *ma nacu mai nun mat nō*

(b) *so sō soou son sot zō zoou zon zot*

かように、サントスの御作業の和らげ以下諸書の難語句解や日葡  
辞書などの排列方式に整然と並び、「う」の位置の前後には関係  
しないのである。これは上の(a)(b)類以外の、もつと錯雑した部で  
も同じである。例えば「ひ」部は、「ひ」「ひやく」「ひやつ」「  
「ひん」「ひやう」「ひつ」「び」「びやく」「びやつ」「びん」  
「びやう」「びつ」の順であるが、ローマ字に直せば整つたアル  
ファベット順になるのである。

*fi fiau fiat fm fiō fit bi biau biat bin biō*

*bit*

(c) アルファベット順の一部修正

アルファベット順に従えば、右のbi以下はfiの前に配すべきで  
ある。即ちハ・ヒ・フ・ヘ・ホ・タ・テ・トの七部では、濁音・清音  
の順にしななければならない。しかし、実際はそうなつていないで  
濁・濁の順序になつている。これは前記(2)の原則に拠るのであつ

て、(2)がアルファベット順に拘束されない、より基本的な原則で  
ある事を示すものである。また「し」部に於いて、「しや」「し  
やく」「しやつ」「じや」「じやく」の拗音はそれ／＼清音・濁  
音の末尾に配してある。これもアルファベット順からすれば「し  
や」「(sh)類が「し」「(j)類の前に、「じや」「(ji)類が「じ」類  
の前にあるべきである。事実がこれに反するのは、やはり前記(3)  
の原則に拠るのである。「ち」部で「ちや」「(cha)類が「ち」  
(chi)におくれ、「に」部で「じや」「(cha)類が「に」(ni)  
におくれて配してある事実も同じ理由による。これらはみなアル  
ファベット順の機械的適用を控えて、仮名表記による組織上の統  
一を考え、それに適応するような原則を立てたものと言ひべきで  
ある。

入声・促音の排列についても同じ事が言える。それらは原則(5)  
によつて同列に「つ」で表わしたが、アルファベット順排列では  
一律にTの部位に置いてある。もし入声・促音を厳密にアルファ  
ベット順に並べるとすれば、同じ母字を何回も重複して出さなけ  
ればならない。例えば、入声の *coidō, cōitō, cotani* (骨堂・  
骨肉・骨髓)は同じ母字下にまとまるが、促音の *coohō, cōppō,*  
*cōitō, cōxet* (骨張・骨法・骨頭・骨節)などは互に位置を異にし、入  
声ともまた離れざるを得ない。しかもこれらを仮名で書き分ける  
方法はないから、重出する母字はみな「骨」と記す他はない。こ  
れでは字を求めするための字書として不便である。そこで発音上厳  
密には区別すべきであつても、一括してTの位置にまとめ一母字  
を立てるといふ便宜的措置に出たのである。そうすればこれまた

組織上の統一と使用上の利便とを考えて、アルファベット順排列基準の一部を修正したのと言えるであろう。以下右の修正を含むアルファベット順を便宜上ABC順とよぶ事とする。そこで四十四部の母字排列を調べてみると、次の二十部ではABC順に背くものを見ないのである。

わ・わ・よ・そ・つ・ね・な・む・う・や・ま・ふ・あ・ゆ・め・み・し・ひ・も・す(但し「わ」は「ひ」類しかない。また「め」部の「めう」はHueoと見る。)

右の二十部の中に「い」部から「り」部まで、一連の九部が含まれていない事は注意すべきであろう。

(イ)意味連関による排列

上述の二十部を除いた残り二十四部も、ABC順に従わないのは一部分にすぎない。しかもそのような部分は、実はABC順以外の基準によつて、排列されたと考えられる場合が多い。例えば「ほ」部清音は、次のように排列されている。

ほ (補)      ほう (奉……)      ほく (北)      ほう (北)  
 ほん (本……)      ほつ (法……)      ぼく (北)      ぼつ (北)

こゝでABC順に合わないのは「北」だけであるが、それが「法」類と別個に扱われたのは「北」と同字だからである。次の「か」部も同じである。〔母字は必要ならこの他省く。〕

か    かく (客……各)      かつ (各)  
 かん    かう (合)      かつ (満・合)      かく (各)      かい  
 う (合)    が      かく (学)      が      がつ (合)      が  
 がう (拷……降)      かう (降……江)      がう (江)

かのような例は右の他各部に散見し、やはり一つの基準であつたかと思う。これは同字異音の母字を同位置に並べる方式であつて、意味連関による排列法と言へる。しかし同字でも、上例の「学」がく「学」がくの如くABC順に並ぶものもある。従つてこの基準は、ABC順を越えるものとして全篇を一貫してゐるのではない。それはABC順に対して副次的、あるいは例外的原則であつて、実用上の便を考へてした便宜的措施であらうと思はれる。

さて右の意味連関による排列の部分を除いてみると、あとは大体ABC順に並ぶと言へる。即ち上掲の「ほ」部はABC順になり〔まの二部、ちの二部、か部には清・濁音の順序の狂いもあるが、それも意味連関に導かれたと見れば、これも右に準ずる。この他一ヶ所だけABC順に合わないものが九部「い」「と」「る」「た」「れ」「く」「こ」「て」「さ』、二ヶ所のもの六部「ろ」「へ」「ら」「け」「き」「せ』、四ヶ所のもの二部「は」「を」〕となる。特に錯雑してゐるのは「に」「ち」「り」三部であるが、みな拗音を含む複雑さの故に乱れたのであつて、ABC順に基づく事は明らかに認められる。要するに、母字排列の基本方針がABC順にあつた事は動くまい。それに意味的排列が混じてゐるが、これは後述の熟字排列でも全く同じである。編者は母字・熟字双方に同じ方針を採つたのである。そうすると、熟字排列に方針の変動が認められる〔本部の三〕と同じく、母字排列も初め意味連関に拠り、それを後にABC順に改めたのではないか。前述の「い」以下九部に乱れが目立つのも、それと関係があるのではないかと考へられる。

## 二、熟字の排列

(一) ABC順の排列

各母字下にあげた熟字は、ABC順に並んだ所が多い。「あ」部「悪」の條の各項にローマ字綴を添えてあげれば次の如くである。

○悪(aku) 一病(bio) 一木(boen) 一知(chi) 一知識(chixiqi) 一虫(chu) 一  
道(dou) 一毒(doen) 一僻(kei) 一兵(heio) 一筆(hi) 一方(fo)  
一法(hou) 一風(fu) 一字(gacu) 一言(gan) 一遊(guicun) 一魚(guio)  
一業(gu) 一行(guio) 一女(gio) 一事(ji) 一時(ji) 一神(jin)  
一食(kou) 一獸(ka) 一鷹(ma) 一味(mi) 一名(mid) 一物(mot)

部	母字数	総熟 字数	ABC順 熟字 数 (5字以上)	百分比	部	母字数	総熟 字数	ABC順 熟字 数 (5字以上)	百分比
い	34	466	32	6.86	う	9	85	28	32.9
ろ	13	60	0	0	の	5	27	14	51.8
は	47	444	57	12.8	く	82	603	221	36.7
に	14	127	0	0	や	14	121	69	57.2
ほ	33	288	64	22.2	ま	19	114	28	24.5
へ	19	165	43	26.0	け	96	494	214	43.3
と	32	175	28	16.0	ふ	46	442	262	59.2
ち	65	439	189	43.0	こ	73	496	258	52.0
り	32	216	53	24.5	て	49	366	200	54.6
ぬ	1	3	0	0	あ	16	163	122	74.8
る	8	35	24	68.5	さ	63	439	216	49.2
な	17	65	10	15.4	き	99	718	378	52.6
わ	13	88	42	47.7	ゆ	20	91	24	26.4
か	85	651	420	64.5	め	13	130	57	43.8
よ	13	70	47	67.1	み	12	78	39	50.0
た	63	454	272	59.9	し	227	1501	729	48.5
れ	23	126	64	50.7	ゑ	44	252	134	53.2
そ	31	152	59	38.8	ひ	52	337	218	64.7
つ	7	39	13	33.3	も	19	96	55	57.3
れ	4	45	38	84.4	せ	100	652	324	49.7
な	9	75	50	66.7	す	22	175	115	65.7
ら	24	169	75	44.3	計	1672	11823	5349	45.2
む	5	91	71	78.0					

一日(ichi) 一人(ichin) 一黨(ichidō) 一池(ichi) 一草(ichisō) 一相(ichisō) 一紙(ichishi) 一左(ichisā) 一流(ichiryū) 一類(ichiryū) 一僧(ichisō) 一疥(ichisō) 一草(ichisō) 一相(ichisō) 一紙(ichishi) 一左(ichisā) 右(ichisō) 一木(ichiki) 一黨(ichidō) 一錢(ichisen) 一説(ichisetsu) 一紙(ichishi) 一左(ichisā) 心(ichin) 一所(ichisō) 一衣(ichie) 一趣(ichisui) 一穢(ichisei) 一因(ichin) 一縁(ichien) (yen) 一友(ichitomo) 一吳(ichiwu) (ki)

右の申傍線の六つを例外として、他はABC順に整っている。また「天」は一〇二の熟字を従えている中八七はABC順に並んでいる。かゝる例は他に少なくない故、単なる偶然とは言えず、編者の意図によるものである。今五字以上がABC順に並ぶ場合に限つて熟字数を数え、全熟字数との比率を求めれば、ABC順排列の密度がわかる。右表で、全篇の約四五%がABC順排列と知られるが四字以下の分も加えれば、この比率はずつと高くなる筈である〔四字以下を除いたのは、偶然〕。ともかく母字排列の場合とともに、編者の基本方針がこゝにある事は明らかであろう。これを部別に見ると、大体「を」部あたりに一つの断層が認められ、その前後で比率の違いが目立つ。たゞ「ち」「る」部の高率と「ま」「ゆ」部の低率とが例外になる。また同じく「を」部以前でも、「い」「ろ」「は」「に」など初めの部ほど低率である事実も注意をひくのである。

(白)他の基準よる排列

ABC順に従わない部分には、特別な基準のない任意排列もあるが、また次の如き別の基準も認められる。この別基準の一は疊語の排列法である。疊語は踊字を用いて母字の直下に出し、ABC順に

もまた次の意味的基準にも拘束されないのがきまりになっている  
 ○代(だい)ニモノ物…… ○年(ねん)キミ代記(だい)月(げつ)……  
 踊字はまた次の如く第二項にも用いられる。

○延(えん)キ喜(き)…… 曆(り)キ寺(てら) ○鷄(けい)キ鳥(とり)…… 頭(かぶ)キ花(はな)

これは「延曆寺」鷄頭花」を示す。従つてかゝる場合と混同しないように、疊語は最初に出す事に定めたのであらうと思ふ。

別基準の第二は、意味連関の基準である〔前記原則の(7)〕。次に一二の例をあげてみよう。

○一(いち)日(にち)月(げつ)宇(う)河(か)郡(ぐん)一城(じやう)一樓(ろう)一場(じやう)寺(てら)一門(もん)一里(り)一陳(ちん)  
 一在所(しよ)一郷(きやう)一堂(たう)一屋(いつ)一夏(げ)一時(じ)一期(き)一代(だい)一人(にん)一女(にょ)一佛(ぶつ)一牛(ぎゆ)  
 馬(ば)一魚(ぎゆ)一医(い)一僕(ぼく)一族(ぞく)一賊(ぞく)一面(めん)一眼(い)一目(め)一毛(もう)一髮(はつ)一舌(ぜつ)一官(くわん)……  
 ○別(べつ)キ地(ち)一國(こく)一陸(りく)一家(け)一寺(てら)一座(ざ)一所(しよ)一宅(たく)一流(りゅう)一道(だう)一父(ふ)一方(ぱう)  
 時(じ)一夜(や)一人(にん)一女(にょ)一妻(さい)一夫(ふ)一子(し)一友(ゆう)一腹(はら)一相(さう)一智(ち)一體(たい)一心(しん)一淚(なみだ)……

かゝる例は他にもあるが、その多くは節用集の門立に見る、乾坤(天地)・時節・人倫・生類(氣形)・支体などの分類に合うし、中には右の例の如く順序までも一致するものがある。しかし、かゝる分類を貫く事は困難なので、乱れも少なくない。たゞ注意すべきは、右のように整っているのは、一條の中でも前半にしか見られない事と、部別に見ると「い」から「を」部のあたりまでに著しく、それ以後では皆無ではないが目立つて少なくなる事である。即ち、ABC順の比率の低い部分に多く、高い部分に少ないので、両者の消長が相関連しているのである。要するに本篇の熟字排列は、ABC順が基本であるが、これと相容れない意味連関的方式

なども混在し、任意に累加したとしか思えないものもあつて、必ずしも整つてはいないというのが実情である。

### (a) 排列方針の変動

上述の如く諸種の排列法が混在する事実をいかに解すべきか。

これはやがて落葉集本篇の成立事情に連なる問題であるから、次にこの点に考察を進めてみよう。

(a) 任意の排列　まず編者が節用集など辞書類を利用し、それから資料を得た事は容易に想像される。「は」部には母字「配」が重出して、別々に次のように記してある。

○配は分ぶん一いっ購くわん一いっ巻くわん一いっ流りゅう一いっ当たう一いっ所しよ (三丁ウ)

○配は分ぶん一いっ購くわん一いっ巻くわん一いっ流りゅう一いっ当たう一いっ所しよ (五丁オ)

これについて土井先生は、前者は彼此の資料に基づいて集録したものであり、後者はその資料の一を不用意に再録したか、初めには用いながつた別の資料を採録したかであろうとされ、後者が伊勢本系統の節用集と密接な関係をもつ事を明らかにされた(吉田支七の研究、二)。今両者の排列を見るに、前者は大体ABC順に整つているが、後者はそうなつていない。母字排列から言つても、前者は正当の位置にあり、後者は乱れている。これは資料からそのまま熟字が採られた事、それがやがて編者の方針によつて整序された事を思わせる。「平」の條中、「平へい一いっ生せい一いっ窓まう一いっ懐くわい一いっ隊たい一いっ均ぐん」の部分は、僅かの差があるだけで饅頭屋本節用集に合致し、近い関係が認められるが、(上掲ウ、二九頁)、排列上の順序はない。これも資料をそのまま写しただけで、まだ整序されない状態をとめていたのであろう。かゝる点から察するに、最初諸種の資料から熟字を採

り母字別に累加したが、まだ一定の基準によつて整序するには至らなかつたのであろう。

### (b) 意味連関による類集・排列

右のように熟字を蒐集累加しただけでは檢索に不便であるから、当然一定の基準による排列が必要となる。合理性とともに実用性を重視した吉利支丹が、この点に無関心である筈はない。この必要に應じてまず採られたのが意味連関の排列ではなかつたらうか。その手本としては、資料として利用した節用集の組織があつた。

「法」の條の初めに近く「法はう一いっ師し一いっ皇わう一いっ印いん一いっ眼がん」と並ぶ熟字がある。これはそのまま饅頭屋本節用集の人倫門に見える(伊京集、黒本本・天正十八年本・易林本等は一致しない)から、それを承けたのかもしれない。このように節用集の同じ門から数字を採る時は、自然に意味的類集ができたのであり、かゝる事は稀でなかつたらうと思う。しかし今本篇に見る意味的排列は、右のようなおのずからなる累積だけだと言うのではない。編者が意味連関の基準を採るようになったについては、上述のような事実が導きとなつたであらうと想像するのである。後に述べるが、ABC順に整つた系列の中に、順序の乱れるのかもまわずに意味的排列を残した例がある。それは編者が、そうする事の利点を知つていた意識的措置だと思ふ。即ち編者が意味連関を基準として意識的に整序した段階のあつた事が考えられる。節用集の門立の順に天地・時節・人倫・気形・支体と類集排列した部分があるのも、右の推論を助けるものである。

さて、かゝる意識的整序を加えた結果はどうかというに、意味

分類の明確な基準が立ちにくいために、全篇を整然と統一する事はできなかった。結局分類しやすすい熟字を類集し、他は任意排列のまゝに残す事になった。意味的排列が一條の初めの部分にあつて、後半は任意の排列になつてゐる事実（前項(參照)がそれを示している。そしてこのような熟字排列をもつ母字が「い」から「を」部あたりまでに多い事は既に述べたが、「一」「白」「半」の條も同じ。)、また「わ」部以下にもないではない。「名」「左」「霜」「初」「畫」等の諸條。また一旦意味的に排列されたのを、さらにABC順に並べかえる途中の状態を示す例が「せ」部（「先」後出）にある。これらの点からすれば、意味に基づく一次的な排列操作は、「を」部以前に限らず、一応全篇に及ぼされたらしい。しかもその結果は、編者の意図する統一的組織にはまだ遠いもので、編者は、この方式に満足する事はできなかったであらうと考えられる。

(c) ABC順の採用 こゝでABC順の採用が考えられたであらう。それはローマ字本の辞書類に使われ、吉利支丹には手馴れた方式であるから、その適用が考えられたのは自然である。ある母字の條下に、意味的排列とABC順排列とが併用された例は「を」部の前にも後にもある。次に各一例をあげてみよう。

○ 一 日 一 月 一 字 …… (天地・時節・人倫・氣) …… 惡 一 別 一 段 一 同 一 雅 意

儀 一 膳 一 樹 一 藥 一 衣 …… (以下ABC順)

○ 老 一 人 一 休 一 翁 一 者 …… (人倫のみ) …… 婆 一 病 一 木 一 虎 一 劫 一 苦 一 樹 一 梅 一 兵 一 筆 一 蛭 一 学 一 顔 一 眼 一 牛 一 老 一 年 一 若 一 農 一 犬 一

懐 一 境 一 作 一 足 一 犬 一 成 一 技 一 松 一 少 一 色 一 賊 …… (三例外はABC順)

同じような例は他にもあるが、ともかく「を」部以後にも例がある事、それにとの條も意味的排列が先でABC順排列は後にある事実は、一応全篇が意味的に排列され、その後二次的な整序基準としてABC順が採られた事を示すもので、前項の推論と照応するのである。

前述のように、ABC順排列の密度が「を」部以前に高くてそれ以後に低い事からして、そのあたりで排列方針に変動があつたのではないかと考えられる。そして意味的整序が一応は全篇に及んだと考えられる故、かゝる方針の変動はその後の段階「意味的排列をさらに整える段階」の中途、「を」部のあたりで生じたと思ふなければならない。この事は、意味的排列は「を」部以前に於いて整つた形を見せ、それ以後ではABC順が整つてゐる事、即ち量的相連に加えて両排列の質的相連が認められる点からも察せられるのである。

(d) ABC順以外の排列併用 かくて、「を」部以後はABC順の整序が進められたであらうが、中にはABC順を一部乱しても意味連関による排列を故意に残した跡がある。

○ 朝 一 一 暮 一 夕 一 霞 一 家 一 歌 一 耕 一 土 一 拜 一 元 一 天 一 月 一 日 吟 一 意 ……

右の傍線部分だけがABC順に合わないが、いずれも隣の熟字と意味的連関がある。

○無<sup>ひ</sup>善<sup>ぜん</sup>惡<sup>あく</sup>佛<sup>ぶつ</sup>妓<sup>げい</sup>別<sup>べつ</sup>知<sup>ち</sup>飯<sup>はん</sup>量<sup>りやう</sup>辺<sup>へん</sup>比<sup>ひ</sup>法<sup>ぽう</sup>明<sup>めい</sup>  
 心<sup>しん</sup>念<sup>ねん</sup>二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>官<sup>くわん</sup>問<sup>もん</sup>來<sup>らい</sup>差<sup>しや</sup>別<sup>べつ</sup>始<sup>し</sup>終<sup>しゆう</sup>職<sup>しやく</sup>色<sup>しき</sup>障<sup>しやう</sup>…  
 ○大<sup>だい</sup>裡<sup>り</sup>善<sup>ぜん</sup>惡<sup>あく</sup>犯<sup>はん</sup>麥<sup>ばく</sup>便<sup>べん</sup>部<sup>ぶ</sup>夫<sup>ふう</sup>分<sup>ぶん</sup>法<sup>ぽう</sup>慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>  
 兵<sup>へい</sup>福<sup>ふく</sup>…

これも同じだが、「無量无边」「無二無三」「無始無終」「大慈大悲」など連ねて用いられる事もある故、わざと並べて配したのであろう。

右二條に「善<sup>ぜん</sup>惡<sup>あく</sup>」とあるが、同じ並列は「不<sup>ふ</sup>」「諸<sup>しよ</sup>」「積<sup>しやく</sup>」「落<sup>らく</sup>」の條にもある。「一月一日」が「毎<sup>まい</sup>」「朝<sup>ちゆう</sup>」「教<sup>きやう</sup>」「砂<sup>さ</sup>」「落<sup>らく</sup>」の條に、「一<sup>いつ</sup>下<sup>げ</sup>上<sup>じやう</sup>」が「天<sup>てん</sup>」「案<sup>あん</sup>」「最<sup>さい</sup>」の條に見えるのも意識して連ねたものであろう。即ち編者は、かゝる意味連関の並列法にも意義を認めていたのである。そのためにABC順整序の際にも除外して元の形を残したものとと思われる。

また一母字に屬する熟字が四五字以下の場合、任意の並列になつたのが多い。少なければそれだけ整序も容易なのに整序してないのは、檢索上さほど不便でないからであらう。

例 並列の改変・増補・修正

熟字の蒐集並列の實際の手順はどうかというに、まずカードを用いたのではないらしい。

○誦<sup>どく</sup>師<sup>し</sup>誦<sup>じゆ</sup>書<sup>しよ</sup>殘<sup>ぜん</sup>

この「誦<sup>どく</sup>」は「誦<sup>じゆ</sup>」の誤である(卷末正)。即ち初め「誦<sup>どく</sup>誦<sup>じゆ</sup>」となつた中間に「師<sup>し</sup>」を挿入した時、誦字で記した訓注を訂正し残し

たのである。これで熟字を補う際、稿本の字間か行間かに書き入れた事が知られる。

右は音訓を注記した後の補入であるが、初めの蒐集並列の段階では、漢字だけで音訓は注記してなかつたらうと考えられる節がある。

○大<sup>だい</sup>裡<sup>り</sup>善<sup>ぜん</sup>惡<sup>あく</sup>犯<sup>はん</sup>智<sup>ち</sup>地<sup>ぢ</sup>強<sup>かう</sup>温<sup>うん</sup>施<sup>せ</sup>死<sup>し</sup>士<sup>し</sup>…  
 ABC順系列中の右の如き乱れは、偶然の混乱ではない。ABC順整序の際、「地<sup>ぢ</sup>」をチ、「士<sup>し</sup>」をシと認めて相当位置に据えたのである。次の例も同じように解せられる。

○円<sup>えん</sup>墨<sup>ぼく</sup>蓋<sup>がい</sup>明<sup>めい</sup>教<sup>きやう</sup>去<sup>きよ</sup>宗<sup>しゆう</sup>珠<sup>しゆ</sup>座<sup>ざ</sup>…

○天<sup>てん</sup>馬<sup>ば</sup>罰<sup>ばつ</sup>秤<sup>ひん</sup>暖<sup>ぬん</sup>道<sup>だう</sup>堂<sup>たう</sup>童<sup>どう</sup>…

また次のように、ザ・ダ行音の混乱に基づく例も一二にとどまらない。

○難<sup>なん</sup>病<sup>びやう</sup>句<sup>く</sup>苦<sup>く</sup>行<sup>かう</sup>事<sup>じ</sup>治<sup>ぢ</sup>字<sup>じ</sup>…

○落<sup>らく</sup>馬<sup>ば</sup>墮<sup>だ</sup>月<sup>げつ</sup>日<sup>じつ</sup>地<sup>ぢ</sup>著<sup>ぢやく</sup>字<sup>じ</sup>城<sup>ぢやう</sup>…

いづれも初めジと認め、Jの位置に配したのである。一方には音訓注記を欠いた例もある。

○坊<sup>ぼう</sup>封<sup>ふう</sup>引<sup>いん</sup> ○空<sup>くう</sup>対<sup>たい</sup>江<sup>かう</sup>書<sup>しよ</sup>

彼此合わせ考えると、初めは右の如く漢字だけで、音訓は後で加えたものかと思われる。

また元の原稿に「円明<sup>えんめい</sup>門教<sup>もんきやう</sup>門去<sup>もんきよ</sup>」の如く各項毎に母字を添記してあれば、右の現象は起りにくかつた筈である。しかし實際は母字を各項に記す煩をさけてJ印で表わした。それ故整序の際

直接の対象となつたのは「明—教—去」など個々の漢字であり、従つて「教」はケウとしてりの位置に据えたのである。

○等<sup>ちう</sup>・閑<sup>かん</sup>（<sup>○輩<sup>ばい</sup>・比<sup>ひ</sup>（と部に續）</sup>）

これは「等<sup>ちう</sup>・閑<sup>かん</sup>・輩<sup>ばい</sup>・比<sup>ひ</sup>」の誤であるが（<sup>誤</sup>未正）、最初「等輩」と記してあつたのであれば上の如き誤が起る筈はない。これも一印を記して母字を省く例であつた証である。このような記し方は、恐らくは節用集（<sup>誤</sup>頭屋本・易林本に多い）などにならつたものであろう。結局整序までは漢字だけで操作し、一応整理を終つて後音訓を加え、今見る形になつたのであろう。音の注記に際しては、熟字全体としての発音を考へてかなり慎重に加え、整序の折に犯した誤をもよく訂正している。たゞそのためにABC順に合わない点を生じたが、排列位置まで正す事はしなかつたのである。

さて、ABC順に整序する時、カードを用いなかつたとすれば一度に整える事はできない。そこで熟字数の多い母字の條では、まず整えやすい部分を整序していくつかの群にまとめ、それをさらに一系列にまとめあげる方法をとつたのであろうと思ふ。

○先<sup>せん</sup>・日<sup>じつ</sup>・孝<sup>こう</sup>・烈<sup>りつ</sup>・君<sup>くん</sup>・年<sup>ねん</sup>・代<sup>だい</sup>・月<sup>げつ</sup>・達<sup>たつ</sup>・陳<sup>ちん</sup>・途<sup>と</sup>・書<sup>しよ</sup>・言<sup>げん</sup>・祖<sup>そ</sup>  
後<sup>こう</sup>・便<sup>べん</sup>・非<sup>ひ</sup>・表<sup>べう</sup>・規<sup>き</sup>・王<sup>わう</sup>・皇<sup>かう</sup>・帝<sup>てい</sup>・例<sup>れい</sup>・主<sup>しゆ</sup>・師<sup>し</sup>……

右は一字おきに「(先)―日―孝―烈―君―年―代―月―達―陳―途―書―言―祖―後―便―非―表―規―王―皇―帝―例―主―師……」と時節関係の熟字が並び、その間を縫つて一字おきに「(先)―孝―妣―君―代―達」と人倫関係の熟字が並んでいる。後者は少しの例外を除けばC↓Dの順であり、さらに下へ辿ると、やはり一字おきにABC順に連なつてゐる（<sup>後</sup>は初めと認めたもの）。（<sup>帝</sup>例は例外と見る）。そこで思うに、初めこゝは意味連関により時節・人倫その他の順であつた。その人倫関係以下

の熟字をまず整序して、それを時節関係の熟字の右側行間に転記し、こゝにABC順の一列が成つた。この行間の系列と元の時節関係の熟字とは、やがて一連のABC順に整序される筈であつたが、この手順を経ないままに、行間の熟字が本行の字間に移されてしまつたのであろう。即ちこれは、意味的排列をABC順に改編整序する時の中間的狀態を示すものと見られる。

○光<sup>くわう</sup>・山<sup>さん</sup>・水<sup>すい</sup>・勢<sup>せい</sup>・蝕<sup>じやく</sup>・曜<sup>やう</sup>・儀<sup>ぎ</sup>・降<sup>かう</sup>・憤<sup>ふん</sup>・塵<sup>ちん</sup>・陰<sup>いん</sup>・明<sup>めい</sup>・輝<sup>き</sup>  
臨<sup>りん</sup>・漸<sup>ぜん</sup>・影<sup>えい</sup>・固<sup>こ</sup>

この「曜」以前はS・Y、以下は大体G・Y順に並び、やはり部分的整序の跡を見せている（<sup>韻</sup>の考）。（<sup>も同一</sup>）。このようにして一條全体の整序へと進んだのであろう。

この整序の段階に入つて、排列基準の一部に修正を要する問題に当面したらしい。それは頭イ音をもつ字の排列に関してである。ローマ字綴では「井」「意」など一字一音節のイはY、その他はIを用いる例であるが、これをそのまま適用すると、「因」「音」などはIの位置に（「五」「病」の條）、「意」「衣」などはYの位置並びに（「疎」「御」の條）、互に異なる位置になる。そこで「い」はすべてYの位置におく方針に改めたらしく、ローマ字綴ならばIの位置にあるべき「因」「隱」等をYの位置に配した例が多い（「惡」「善」「雪」などの條）。中にはZの部位より後に並んだ例も稀でないが（「夜」「海」の條）、その中には最後の追補もあろうけれども、一応整序された後にIの位置から末尾へ移されたものも含まれているであろう。

かゝる修正の他に、それまで漏れてゐた熟字を補う事は、最後

まで怠らなかつたのであつて、その場合A B C順に背いても致し方ないと考えたらしい。A B C順に整つている條の末尾に、順序に合わない熟字があるのがそれで、その例はかなり多い。

### 三、結 び

落葉集本編の組織は、初め意味連関による排列をとり、後にはA B C順を基本方針とした。即ち在來の辞書類から熟字を集める際には、特に順序を立てなくても自然に意味的類集になる傾向があつた。やがてそれを第一次的整序基準として、一応全篇を整理したらしいが、意味による分類基準の不明確さの故に徹底せず、結局比較的明瞭なものを類集排列するにとどまつて、他は任意の排列のままに残つた。この基準による整理をさらに進める中、この方式の不備をさとり、「を」部あたりから修正アルファベット順を採用した。この新基準で、「を」部以下を整えるとともに、それ以前にも溯つて修正を加えたが、全篇を完全に統一するには至らなかつた。即ちA B C順排列は「を」部以後に密で、それ以前は疎になつた。たゞ母字排列は、全篇がほぼ整つた形になつたが、これは母字の数は熟字に比べて少なく、それだけ排列し直す事も容易であつたためかと考えられる。一方、母字・熟字の排列を通じて、実用上必要と認めた場合には、A B C順に背く排列をも容認した。大体以上のように推定されるが、そうだとすれば、組織に対する編者の考えは、編纂の進行につれて成長していつたと言えよう。しかし現存本は、時間的制約か何かの事情によつて、その意図が十分には実現されるに至らなかつたものと見るべきで

あろう。今その最後の整序方針をまとめれば、大要次のとおりである。

#### (A) 母字排列

a 発音により四十四部を立てる。各部は清音・濁音に大別し、その各々をA B C順に次第する。

b A B C順の如何にかゝらず、字音が假名一字で記されるものを前に、二字以上のものを後に排列する。

c 入声・促音をもつ母字は、一律に「つ」に統一し、Tの部に排列する。

d 同じ漢字で字音の異なるものは、母字としては別々に立てるがその排列は必ずしもA B C順によらず、便宜上統けて並べる事がある。

#### (B) 熟字排列

a 各母字下の熟字は、A B C順に並べる。

b 但し、イ音を頭にもつ熟字は、假名表記上の統一のためYの部位にまとめる。

c 疊語はA B C順にかまわず母字の直下にあげ、喃字を用いて書く。

d 同じ母字下の熟字が四五字にすぎない場合は、必ずしもA B C順に従わない。

e 意味上密接な連関をもつ熟字で、続けて並べる方が実用上便利と認められるものは、A B C順に従わない事がある。

右の方針に合わない例外もあり、稀に誤謬もあるから、決定的ではないけれど、この原則を知る事によつて利便を得る点もある。

一つには檢索上大体の見当がつく事、また一つには排列順によつて印刷の不備を補い、字音推定の根拠を得る事である。本篇には濁点を脱したと思われるものがかなりある。高羽五郎氏は、ライデン大学本・大英博物館本、及び内野皎亭氏蔵断片などの写真版を比較してその結果を示されたので(国語学資料第三編)、それによつて濁点の存在を知り得るものもあるが、尙不明のものが稀ではない。中には原本に存して写真版に現われないものもあろうが、誤植により原本にないものもあるであらう。かようなものを排列順から推定できる場合がある。例えば、

○当<sup>たう</sup>一<sup>はん</sup>番<sup>ばん</sup>一<sup>だい</sup>腹<sup>はら</sup>一<sup>だい</sup>道<sup>みち</sup>一<sup>きん</sup>公<sup>こう</sup>一<sup>せう</sup>住<sup>じゆう</sup>一<sup>こく</sup>国<sup>こく</sup>一<sup>せん</sup>千<sup>せん</sup>一<sup>じ</sup>時<sup>じ</sup>一<sup>じ</sup>寺<sup>じ</sup>一<sup>めん</sup>面<sup>めん</sup>一<sup>ねん</sup>年<sup>ねん</sup>一<sup>にち</sup>日<sup>にち</sup>一<sup>か</sup>家<sup>か</sup>一<sup>りゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>一<sup>さく</sup>作<sup>さく</sup>一<sup>たい</sup>体<sup>たい</sup>……

傍線の字を濁音とすればABC順に整うので、それらは濁点を脱したものと疑われる。日葡辞書や節用集などについて見ると、

Tyban. Ataru ban. (日葡) 当番(易林本)

Tydoi. Imano yo. (同右) 当代(易林本)

Tydd. Ataru nichii. (同右) 当道(易林・伊本・天正十八年・黒本・鏡頭屋本)

Tyguin. (同右) 当今(易林) arau guin. (サン和)

Tyjen. Xenni ataru. (同右) 一騎当千(易林本・天正十八年)

とあつて、前の推論が確かめられる。この他、「転凡」(せんぼん)「冥罰道」(めいばつだう)「心法」(しんぽう)なども同じで、かゝる例は少くない。

これは母字についても同じである。例えば「ほ」部の濁音母字は次の如く並んでいる。

煩<sup>わん</sup> 暮<sup>ぼ</sup> 善<sup>ぜん</sup> 母<sup>ぼ</sup> 眸<sup>ぼ</sup> 謀<sup>ぼ</sup> 朋<sup>ぼ</sup> 帽<sup>ぼ</sup> 墨<sup>ぼく</sup> 木<sup>ぼく</sup> 乏<sup>ぼく</sup> 目<sup>ぼく</sup> 凡<sup>ぼん</sup> 犯<sup>ぼん</sup> 梵<sup>ぼん</sup> 没<sup>ぼつ</sup> 淳<sup>ぼん</sup>

傍線の「乏」「犯」だけに濁点がなく、その位置からボク・ボンと察せられるが、他の資料はこの推定を支持する。「逢一著」(ふいちやく)「元一服」(げんいつく)「現一世」(げんいちせい)「逆一浪」(ぎやくいちなみ)など右と同類である。

また誤謄訂正の一証となる事もある。「し」部清音母字の中に、「所」(じよ)が混じている。

○所<sup>じよ</sup>一<sup>ま</sup>一<sup>く</sup>縁<sup>えん</sup>一<sup>じゆう</sup>住<sup>じゆう</sup>一<sup>かん</sup>勘<sup>かん</sup>一<sup>じゆ</sup>受<sup>じゆ</sup>一<sup>じ</sup>從<sup>じ</sup>……

これもその位置から清音「所」の誤かと思われるが、日葡辞書・節用集などに照らして訂正することができる。たゞかゝる場合に、全篇が完全なABC順ではないから、排列順だけに頼る事は危険であるが、他の資料と見合せて、推定の一証とする事はできると思う。

要するに、在来の辞書類を資料としながら、第一音節だけをイロハ順に次第するにとどまらず、第二音節以下にまで及ぼした排列は、発音引の組織として一步を進めたものである。ことに仮名書きにアルファベット順を適用したのは本書が最初であつて、この書の著しい特色と言えらるであらう。またアルファベット順を基本的な基準としながらも、その機械的適用に終らず、仮名書きに適應するように修正を加えて統一を図つた事、実用上の利便を重視

して排列を考慮した事などは、たとえ組織としては徹底しない結果になつたとはいへ、よく字書の性格とその果たすべき機能とに注意を払つた、注目すべき業績と言わなければならぬ。

(一九五二・一〇・七訂補)

— 広島大学助教授 —